



# 愛光NEWS

2021年1月

2021（令和3）年2月12日発行

（編集）愛光本部総務部

（TEL）043-484-6391

（メール）<http://www.rc-aikoh.or.jp/>

節分、立春を過ぎて、季節は春めいてきましたが、ウキウキ気分にはほど遠く、先行きの見えない春の到来となりそうです。新型コロナウイルス感染症は緊急事態宣言が延長され、緊張感が持続されています。

法人内でも1月は世の中の動きと同様に、職員の濃厚接触やPCR検査、職員家族の感染等が急増しました。佐倉事業所では職員1名の感染が判明しましたが、日頃の感染対策が功を奏したようで、それ以上の拡がりはなく胸をなでおろしました。危機意識を持続するのは大変ですが、今後も職員一丸となって取り組んでいきたいと思っております。

## □事業経過など（2021.1.1～）

月/日(曜)	記 事
1/1(金)	元旦
4(月)	仕事始め
6(水)	業務執行理事会（本部役員室）/ともいき分科会
7(木)	メンター委員会
7(木)	政府1都3県（千葉・東京・神奈川・埼玉）に緊急事態宣言再発令
8(金)	災害対策プロジェクト（本部第2会議室）
11(月)	成人の日
12(火)	感染症委員会・衛生委員会
13(水)	サービス管理責任者会議（本部第1会議室）
13(水)	政府緊急事態宣言7府県に発出（11都府県に）
14(木)	施設長会議
14(木)	広報委員会（オンライン）
15(金)	佐倉市長来所（小学生書初め展審査・南部児童センター）
16(土)	センター試験に変わる大学共通テスト実施
18(月)	2021年度予算要望ヒヤリング（本部第1会議室）
20(水)	業務執行理事会（役員室）
20(水)	緊急事態宣言で首都圏私鉄、JR終電繰り上げ
21(木)	第46代アメリカ大統領にジョー・バイデン氏就任
22(金)	ICTプロジェクト
23(土)	理事会（書面審査）
23(土)	新型コロナで国内死亡5,000人超
27(水)	中期経営計画策定プロジェクト

## ■おもな出来事

### □理事会書面開催

1月23日(土)開催予定の2020年度第5回(通算第300回)理事会は、新型コロナの関係から書面決議による形式とし、同意書をいただくかたちでの開催となりました。内容は、2021年度に向けた大口の随意契約の承認を得るものでした。また業務執行理事からは、この間のそれぞれの業務に関する書面での報告が示されました。

### □書初め展

毎年1月、南部児童センターで行われる「小学生書初め展」(愛の灯台基金主催)を今年も開催しました。担当者は、コロナ禍の中で密にならないような展示を工夫しました。さらにホームページ上にてオンライン展示、また参加した小学校5校(根郷小、山王小、寺崎小、弥富小、和田小)の全生徒の書を掲示したチラシを作成し、配布しました。

15日(金)には西田三十五佐倉市長に来訪していただき、市長賞2点の選出をお願いしました。書初め展を毎日見に来る人や、学校代表で選出された小学校1年生のお子さんはまずお父さんと一緒に来て、後日お母さんと見に来ていたとの報告を受けました。

### □「こころのポケット手帳」のご紹介

このたび法人の評議員でもあり、佐倉市精神障害者家族会かぶらぎ会会長の大賀四郎様より「こころのポケット手帳」の紹介がありました。大賀様の紹介文を要約します。

精神疾患を患う人の治療での悩みは、①精神疾患の発生の原因がわからず、治療の方法が定まっていない。②治療の中心が薬物療法であるが、服用してもなかなか快方に向かわず、「薬では治らない」との懐疑的見方もでる。③精神療法はいろいろあるが、効果があったとの根拠がわからず、悩みが解決できない等がある。症状の軽い方では家族も協力し外出ができたり、リハビリを取り入れ、症状も改善に向かうことがある。しかしこの場合でも薬の服用がなくなるわけではないのが実態である。家族会では6割の方に引きこもりがみられ、重く患われていて薬物療法を中心とした治療が行われているが、自分に合った薬を見つけるのは容易ではない。

このような中、精神疾患を患う方が薬を服用するに当たり①薬が合っているか、②薬を変更したい、③医師と話し合いたい等の思いを経験することがあるが、薬そのものが分かりづらく、書物を見ても専門用語が並び、また薬局からの説明書も抗精神病薬か、抗不安薬なのかさえ分からない等、薬のことで分からないことが多く、医師との話合いも躊躇してしまうのが現状である。

しかし症状には変化が生じ、波が訪れることから薬の服用は避けられず、薬が分からないでは済まされない。かぶらぎ会では、成田赤十字病院の精神科にお願いし、誰もが分かりやすく理解できるような薬の説明本「こころのポケット手帳」を作成した。精神疾患の薬全般について、また症状が悪化し困ったときの対応や相談先等についても記述し、使い勝手がよいポケットサイズで、一冊200円の安価なものにした。

法人では、この手帳を購入し、関係者に配布したいと考えています。

## ■月報から

### □オンライン就職説明会（本部総務部）

19日(火)城西国際大学とリモートにて就職説明会を行った。毎年、ホテルにて行われていたが、コロナ禍のため、リモートでの開催となった。REMO という説明会会場を想定したリモートシステムで、1ターン30分を3ターン行い、計13名の学生が参加してくれた。初めての試みでもあり、操作やお互いの意思疎通にもやりづらさはあったが、学生からのさまざまな質問を受けることができた。25日には、中央介護専門学校生徒に対して講義形式での説明会を開催した。パワーポイントの資料を基に、動画をはさみながら説明を行った。学生は興味を持ったようで、さまざまな質問を受けた。

コロナ禍により、法人での直接の説明会やインターンシップは中止せざるを得なく、リモートでの説明会を考えなければならない。半面、対面で話しをして、お互いに目を見て肌で感じることはとても大事なことだと思いつく感じた。（事務局長 池田 浩一）

### □手作り神社

#### ①健康祈願！愛光神社（障害者支援事業部）

今年の年末年始はコロナ禍ということもあり、毎年障害者各施設で初詣などに出かけていた余暇活動ができなくなった。そこで、あいこうギャラリーに即席の『愛光神社』を手作りした。

各施設に協力を依頼すると、ルミエールからは鳥居と門松、日中活動(手工芸班)から鈴緒(すずお)、総務部スタッフが作成した賽銭箱、さらにリホープ職員よりアイデアをいただきおみくじを作成した。おみくじの設置場所には、過去にルミエールで使われていた大明神の祠を設置。元旦(金)から12日(火)まで参拝できるよう演出した。この間多くの利用者や職員に参拝してもらった。賽銭箱にも523円のお賽銭が集まった。(今後、募金や寄付金などの際に使用したい)

(総務部福祉相談室 林 拓也)

#### ②コロナが早く治まりますように（高齢者福祉事業部）

例年はちす苑は、正月三が日に近隣の神社に初詣に出かけている。今年はコロナ過で日々の外出企画も自粛中。当然初詣も中止にせざるを得ないので何か代替りの企画をとのことで、今年は手作りして神社を作成した。段ボールで作成した神社に色を塗ってくれたのは男性利用者の方。職人気質の方で普段から「仕事何かない？」と職員に尋ねられて、農作業に装飾作り、タオル畳みと多くの仕事を行ってくれている。立派に出来上がった神社を千田ホールに設置。

「なかなかいいじゃない」と色を塗ってくれた男性利用者も満足気な様子であった。

皆様お参りに足を運ばれ手を合わせて「コロナが治まりますように」「家族と会えますように」とお願いされていた。（はちす苑課長 戸室 輝大）

### □月間目標（めいわ）

18日(月)施設内コンプライアンス会議では、コロナ禍で過ごした1年間を振り返りまだ収束がみえない状況の中で守りたいことを2月の月間目標に決めた。目標は、

「ソーシャルディスタンス（社会的距離）でも、心の距離は縮めて、冬を超えよう」

(めいわ課長 李 連淑)

## □感染症対策の現場で（ルミエール）

18日(月)夜、職員より同居の家族がPCR検査を受け陽性だったと連絡があった。当該職員には出勤停止と今後の保健所からの指示と体調変化について報告するよう指示を出した。夜勤者には当該職員の濃厚接触を懸念して、所属ホームを隔離対象として、防護具の装着等感染防止策を徹底するよう指示した。翌朝必要な物品を補充し、隔離したホームではショートステイの居室をクリーンルームとして外部（中庭）との動線を確認した。

20日(水)利用者4名に発熱症状があり緊張が走ったが、嘱託医による抗原検査を実施した結果、全員陰性であった。その段階で、嘱託医からは隔離解除の見解も示されたが当該職員と家族のPCR検査を実施する方向であったため、検査結果が出るまではホームの対応は継続することとした。22日(月)午前、当該職員のPCR検査が陰性であると報告を受けてホームの隔離対応を終了した。

29日のスタッフ会議では、看護師に出席してもらい今回の対応についての振り返りを行った。課題として『物資の補充』『職員のトイレ』『隔離対応職員と管理職員との意思疎通、情報共有』『ゾーニング』『服やっくんの使用不能』等があげられた。看護師より、『防護具の装備内容、脱着方法』『意思疎通』について意見があげられた。現場職員からの意見をきくと、フェイスシールドで声が聞こえにくい、すべての装備を装着するととても暑い等実際に対応してわかったことが多くあった。しかし、一番わかったことは事前にいろいろな物資を準備して想定をしても、隔離対応が起こった現場ではうまく機能しないことであった。物資はある程度準備していたが、『実際の現場の動き』『フル装備しての動きにくさ』『情報共有のあり方』等具体的なシミュレーションに欠けていた。

初日に対応した職員は、どのように対応するべきか具体的なイメージを持って業務に臨み、支援の形を構築した。その後で出勤した職員にも感染症対策についての装備や支援方法の説明をして、次の職員に共有できるようにした。ホーム職員が高い士気を持ち続けることができたことも大きく、初日から対応した主軸の職員と共に感染症に真っ向から向き合っただけで利用者も支援することができた。今回の反省を踏まえて、施設として感染症対策について『現場で必要なこと』『その時に求められる支援方法』『できる範囲での想定』等を施設、各ホームで考えていきたい。

（ルミエール課長 原 宏之）

## □記憶に残るお正月（リホープ）

お正月と言えば、毎年、初詣、初売りを楽しみにしていたが、今年は新型コロナウイルスの関係で外出ができない。施設の中で神社でも作ろうか…と話していたところ、本館に神社を作ってくれるとの話が聞こえてきた。歩いてお参りに行くことで気分も盛り上がり、想像以上に本格的な神社で、おみくじには利用者も大喜びで、毎年の初詣と同じ感覚でお参りできた。もう一つの楽しみの甘酒やおしるこは、施設の中で振舞った。初売りには行けなかったが、希望の物をネットで購入することで、少し形は変えたが、いつものお正月を過ごすことができた。

利用者にとっての一番の変化は、帰省できなかったことで皆がそろってのお正月になったこと。リホープでお正月を過ごすのは初めてという利用者もいた。いつもと違ったメンバーで年明けを迎えることが嬉しくて、「今年は皆でお正月を迎えるね。」と何度も嬉しそうに話してくれる利用者もいた。数名の入院者がおり、全員そろってとはいかなかったが、いつもと違う、記憶に残るお正月になった。

（リホープ課長 稲垣 直子）

### □おせち料理（はちす苑）

コロナ禍の中で帰省もできないが、利用者はいつも通りの元旦を迎えた。毎年ボランティアで獅子舞に来てくれるご夫婦がいる。70歳台の熟練した獅子の舞である。獅子に噛みつかれると『神が付く』との縁起担ぎがあることから自ら身体（頭は飛沫感染予防のため避けた）を差し出す方もいて喜ばれていた。

おせち料理は、松花堂弁当の中でどの料理にしようか毎年悩むが、最終的にはやっぱり刺身がお好きらしい。かまぼこと、にしんの昆布巻き、はちす苑中庭にある『くちなしの実』でさつま芋を煮てきれいな黄色の栗きんとんも用意した。お雑煮は、焼きもちか咀嚼が十分でない方にはおもちムースのどちらかで良いか職員と検討した。各街の職員が必要に応じて焼きもちを切って誤嚥の事故は防ぐことができた。今年も空っぽのお弁当箱が戻ってきたことが嬉しい正月であった。

（はちす苑管理栄養士 江口 貴子）

### □次の手を考えよう（佐倉市よもぎの園）

新しい年明けとほぼ同じくして“緊急事態宣言”が再発令となり、数名の利用者が感染の不安から再び自宅待機に切り替わってしまった。事業所では“手洗い、うがい、目鼻口は不用意に触らない”等々発信を続けているが、市内でも日々感染者が増え続けており利用者からも不安の声が聞こえてくる。

見通しがつかず我慢の日々を強いられている現状で“緊急事態宣言再発令”はこれまでの日常がさらに遠のいてしまったと感じてしまう利用者もいる。職員はそのような不安を抱えた利用者の気持ちに寄り添いながら、傾聴したり時には話題を切り替えたりしながら少しでも気持ちが落ち着くよう対応している。

請負作業については、年末にかけ活気が出てきていたところだったが“緊急事態宣言再発令”のあおりを受け作業が止まったり、減少したりする業者も出てきた。初めての緊急事態宣言下では現場もどうすれば良いかわからないことが多かったが、今回は“どうやって今を乗り切っていくか”“次の手を考えよう”と前を向いている職員達の姿に心強さを覚えた。

（佐倉市よもぎの園主任 近藤真一）

### □行政からの印刷（ワークショップかぶらぎ）

年度末に向けて、積極的に印刷作業を行政へ働きかけている。既に効果が出てきて最近では、佐倉市において高齢者福祉課から発注増につながり、富里市では障害福祉課、企画課からの新規発注につながっている。また、次年度の発注につなげるため行政側の予算要求のための見積もり依頼もいただいている状況だ。

コロナ禍にありイベントチラシ等の案件は当然ないままであるが、年度末は報告書や市民への周知事項などで印刷案件は必要とされる。法人外部からの印刷案件のみに絞れば、11月以降は前年同月比で130%を超える増収を続けている。上半期苦戦を強いられた分を取り返すべく努力を続けたい。

（ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹）

### □キャッシュレス化（山王の家）

山王の家では現在、小口現金や仮払い、立替金等での現金の取り扱いをなくし、キャッシュレス化を実施した。自己管理している1名の方を除き、ある1名の利用者は、毎月のお小遣い制とし、職員と小遣い帳をつけながら現金の自己管理を行っている。その他の利用者は、電子マネーSuicaを個人用に用意し、毎月チャージしたSuicaで買い物をするようにした。今までは、不特定多数の職員が金庫内の現金を取り扱っていたため、使途不明金が発生する危険性があったが、この状況を解消することができた。また、業務量の削減と経理上での手数料を削減することもできた。

（山王の家サービス管理責任者 高梨 和憲）

### □2度目の緊急事態宣言と介護予防への取り組み（総合相談センター）

8日(金)緊急事態宣言が再発令され、対応に追われた。地域包括支援センターでは佐倉市から通知が出され、高齢者が集まる各種委託事業の中止または延期、勤務体制を3分の2以下へ減員するよう分散勤務の推奨が提示された。4月と同様、部屋を分けたり公休を分散したりするなど対応している。

このような中、厚労省からは、感染拡大防止に配慮した介護予防・見守りなどの取り組みの推進について示されており、高齢者がフレイル（虚弱化）状態にならないよう適切な支援を行うこととされている。

佐倉市では、年度当初64団体が介護予防活動を行っていたが、4月の緊急事態宣言で全団体が自粛。10月末までに30団体が再開されたが、5団体が解散を決め、今回の再発令で51団体が休止中である。一方で、高齢者の心身の状態について、「外出機会は約20%減少し、認知機能の低下やうつ傾向にある該当者が約5%増加傾向にある」という調査報告もあり、実際の相談内容でも実感している。

ただ現状として、今までと同じような方法で継続する難しさもある。通わなくてもつながりができる場づくりなど、来年度以降も模索していくことになりそうである。

（総合相談センター所長 森 由美子）

### □ありったけのありがとう！！ 感謝(ボランティア委員会)

愛光でボランティア活動をしてもらっている方々に、日ごろの感謝を込めて、毎年ボランティア交流会を開催していたが、今年度は新型コロナウイルスの関係で中止とした。施設でのボランティア活動の受入れも自粛となり、ボランティアさんと交流する機会もなく、1年が過ぎようとしている。

ボランティア委員会では、今年度はボランティア交流会に代わるものとして、今まで愛光でボランティア活動をしてもらっている方々に、様子伺いの挨拶状とよもぎの園、ワークショップかぶらぎで制作しているマスクを送ることにした。マスクは数種類のデザインで171個、29日に発送した。翌日には手元に届いたようで、ボランティアさんからお礼の電話が入った。また、愛光本部にはお礼の手紙が届いている。その一部を紹介したい。「その出来映えの素晴らしさに感動致しました。ひと針ひと針に心が込められているように感じられました。大切に使用させていただきます。」「今はマスクが大切ですので、とてもありがたいものでした。皆で仲良く仕上げたのですね。大切に使用させていただきます。」

（南部地域福祉センター所長 横川 民夫）

## □各学童保育所より

### 「ヒヤリ、コロナの影響？」

ある夜、学童の入る建物のガス警報器が作動した。もちろん学童でガスは使用していない。小一時間で鳴動は納まったが、原因は不明である。前日までと違うのは、アルコールスプレーをトイレ掃除で使用したことぐらいであった。後日調べた結果、やはりアルコールが原因であった。あるガス会社の報告によれば、最近コロナ対策の消毒で使用したアルコールを感知して、警報が鳴るケースが増えているとのこと。可燃性のガスであれば制汗スプレーや害虫用スプレーなどにも反応することがあるそうである。ガス漏れでなかったのが幸いだったが、思わぬコロナの影響であった。即、各学童で共有し、注意喚起したところである。

### 「鬼も柱も探し出せ！」

いまだ人気絶大の「鬼滅の刃」、これをもとに校庭いっぱいを使った宝探しを行った。話に登場する「鬼」や「柱」らを数十枚のカードにして職員が隠し、子どもたちが広い校庭を息を切らせながら探し回った。「今度いつやる?」「またやって!」この言葉が聞きたかった!

今日も職員は「密」を避けながら、子どもたちにいかに楽しんでもらえるかを考える。楽しみを模索し続けながら、みんなで、コロナを乗り越えていきたい。(寺崎学童保育所)

### 「寒さにも負けず」

プランターに植えたチューリップの球根が芽を出し始めた。例年にない寒さにも負けない自然の力に勇気もらった。鉢植えのビオラも咲いているが、この鉢には、クロッカスの球根も植えてある。クロッカスはまだ芽を出していないが、チューリップよりも一足先に花を咲かせてくれるはずなので、今から咲くのが楽しみである。子どもたちにはプランターに何を植えてあるのかは明かしておらず、ささやかな子どもたちへのサプライズにしている。(山王学童保育所)

(学童保育所主任 齋藤 理江)

## □「つなげる」(南部児童センター)

「ゆりかごタイム」(0歳親子対象)のプログラムに、「ママのおしゃべりタイム」の時間を設けている。コロナ禍前は、30組程度の参加者が、フリートークしていた。輪に入れない母親のところには、インストラクターが「橋渡し」を行ってきた。現在の参加者は、定員10組のところ7~10組。

場を盛り上げようと、車座になってインストラクターが話を進める形式にした。毎回輪の中に入れない参加者がいるため、意図的に2人組にペアリングしてみると、ママのコミュニケーション能力のすばらしいこと!子どもの名前、月齢などの自己紹介から始まり、「髪の毛ふさふさです(笑)」「その服GU?」などなど、自然な形で会話が弾み、インストラクターはお役御免。

インストラクターは「聞き役」「つなぎ役」でありたいと思っている。しかし、現在の来館者数の平均は15名程度。1対1で来館者と話す場面が多くなってきた。同じ地区や月齢の近いママ同士がつながった時の、うれしい顔がもっと見たい!「子育ての仲間づくり」のための支援について、インストラクター間で再度共有していきたい。

(南部児童センターインストラクター 鈴木 信子)

## ■職員状況(1/31現在)

	人数	前月比
正職員	173	
サポート職員	38	
非常勤職員	143	+1
計	354	+1